

第10回スペイン・マドリッド自治大学等訪問研修報告

—海外教育実習の可能性を模索しつつ—

隅 敦¹

Report on the 10th visit to the Autonomous University at Madrid in Spain

Exploring the Possibilities of Overseas Teaching Practice Lessons.

Atsushi SUMI

E-mail: sumi@edu.u-toyama.ac.jp

[摘要]

本稿は、2022年度（令和4年度）に実施した部局間協定締結校であるスペインマドリッド自治大学教育学部を中心に第10回目の訪問研修の報告である。今回の訪問ではマドリッド自治大学での講義履修および講義内と同大学の教育実習生派遣先の公立学校において引率学生が日本の図画工作科の教科書を翻訳して英語で模擬授業を実施した。さらに、プラド美術館をはじめとする世界的な美術館等の作品見学や近郊の世界遺産の見学も実施した。内容については、各プログラムの概要と学生の事後レポートの抜粋を中心に構成した。今後は、本訪問研修を海外教育実習として発展させていけるように、CLIL教育の観点から見直しを図りながら、より充実した訪問研修をめざしたい。

This article is a report on the 10th visiting training conducted in 2022, mainly at the School of Education of the Autonomous University of Madrid in Spain, with which we have an interfaculty agreement. During this visit, my students attended a lecture at the Autonomous University of Madrid, and during the lecture, they translated a textbook of the Japanese Arts and Handicrafts course and conducted simulated classes in English. We also visited world-famous museums such as the Prado Museum and the surrounding world heritage sites. The content was mainly an overview of each program and excerpts from students' post-reports.

キーワード：海外教育実習、公立学校における模擬授業、図画工作科、造形遊び、内容言語統合型学習

Keywords：Overseas Teaching Practice Lessons, Simulated class at public school, Art and Handicraft Subject, Zokei-Asobi, CLIL(Content and Language Integrated Learning)

I はじめに

筆者は、2008年度（平成20年度）から、マドリッド自治大学教育学部（2017年度から部局間協定締結校）の教員と交流を持ってきた。初期の段階の交流については、すでに発表¹しているが、今回は6人の学生を引率しての第10回目の訪問研修について報告を行う。

学生を引率しての本訪問研修は、2010年度（平成22年度）から2018年度（平成30年度）まで9回、

連続して行ってきた。しかし、2019年度（令和元年度）から2022年度（令和3年度）までの間は、世界的なCOVID19（コロナウイルス感染症）の流行により中断を余儀なくされてきた。特に2019年度（令和元年度）は、訪問の準備（現地での学生の授業準備を含む）をほとんど終えた出発の4日前に、ヨーロッパでの急激な感染状況の広がりを鑑みて中止を決定した。その後、現地からのニュース報道で、我々の滞在予定期間中に、感染が爆発的に広がり、その間、渡航していた日本人旅行者の中にも帰国後発症した事例が報告された。今回4年ぶりに訪問研修を再開するに当たっては、2022年10月に、マド

¹ 富山大学教育学部

リッド自治大学側から、スペインから、そろそろ、感染の拡大は収束しつつあるので、学生を引率しての訪問を再開しないかと、交流の窓口をお願いしているパブロ・ロメロ・ゴンザレス教授からメールがあったことがきっかけである。本学の国際交流課に確認を取った上で渡航の検討を始めて参加学生を募り、その結果、筆者の指導する学校教育コースの図画工作科ゼミナールに所属する3年4名、4年2名の学生が参加することとなった。

今回の報告では、教育に関わる内容について引率学生のレポートから適宜文章を抜粋しながら、滞在記録を紹介していくことにした。その過程で海外教育実習の可能性を探りながら、報告をまとめていくことにする。

Ⅱ 現地公立学校における研修

1 訪問校について

訪問先は、マドリッド市近郊のトレスカントス市にある公立の幼小併設学校であるアルデバラン公立学校²である。当校は、マドリッド自治大学教育学部の教育実習生受け入れ校であり、コーディネートは、かつて人間発達科学研究科に留学して筆者の指導の元、修士を取得して修了した現マドリッド自治大学講師のソフィア・パステル・マタモラス氏に依頼し、(氏は学部学生時に当校で教育実習に参加していた)公立学校との時間調整および材料の準備等に協力していただいた。この学校には、過去4回訪問し³、学生に教師役をさせて授業体験もさせてきた⁴ことで、受け入れについては、ご理解をいただいている。

2 ZOKEI-ASOBI WORKSHOP について

(1) 概要

正式に現地のカリキュラムに組み込まれた美術の授業を行うわけではなく、日本の学生がスペインでワークショップを実施するという形式で行った。その際、実施する内容は、日本の現行の小学校図画工作科教科書に掲載された各学年の「造形遊びをする活動」⁵の題材から、材料の調達が可能なものを選んだ。この活動は、ソフィア氏が富山大学に滞在中に講義の中でその存在を知って、スペインの初等美術教育では実施されていないことから、研究対象としているため氏の研究の一助にもなるし、現地

の子供たちにとって、初めての経験になることから意義がある内容である。

渡航前に実施担当の学生がそれぞれタブレットPCのプレゼンテーションソフトで英語に翻訳した内容を作成して、スペインの子供にも理解できるように準備した。アルデバラン学校のクラス担任の先生方に事前に見せて内容を理解させ次に英語に翻訳した学習指導案を作成させた。また、教師役以外の学生のタブレットPCにも、全員の学生が作成したプレゼンテーションを転送しておき、ワークショップの際にサポートができるようにしておいた。材料については、現地でどのように調達できるか事前に確認できない事もあったので、事前に、日本から必要とされる材料を持参することにした。

(2) 2023年3月13日(月)(訪問3日目)の実践

① 9時00～9時45分 5歳児クラスA対象「いっぱいつかってなにしよう」⁶

「初めてのワークショップでとても緊張していました。英語を理解できている園児は少なく、授業という形ではなかったですが、子供たちはとても楽しそうに活動していました。日本から持ってきた材料(紙コップ・洗濯バサミ・色紙)の他にソフィアさんが材料を用意してくれたのでより一層作品が華やかになりました。言語は通じませんでしたが、擬音や『uno,dos,tres』など数字のみの簡単なスペイン語でも子供たちはリアクションしてくれ、一緒に活動することができました」(学生A)。

② 11時～11時45分 1年生Aクラス対象「いっぱいつかってなにしよう」⁷

「本ワークショップでは、5歳児クラスとは対象に材料を減らし、日本から持ってきた(紙コップ・洗濯バサミ・色紙)に加えアイスバーのみを使用しました。園児に比べ1年生の方が活動の趣旨を理解していて、作品を大学生に見せにきてくれ、『何を作ったの?』という問いに対しても答えてくれました。全体を通してplantを作ったという子供が多かった印象がありました。風が強く吹いていたため、紙コップのタワーが倒れてしまったり、並べた色紙がずれたりしましたが、子供たちは壊れる作品に対しても面白さを感じているようでした」(学生A)。

③ 11時45分～12時15分 1年Bクラス対象「いっぱいつかってなにしよう」⁸

「本ワークショップを自分で行い、どの子供も材料をたくさん使い、自分なりの表現を楽しむ様子が

見られました。初めは英語での説明があまり伝わっておらず、心配でしたが、イラストを用いた説明や身振り手振りを使った説明をすると、うなずく子供が増えました。カラフルなスティックを使っていた子供らは、初めは何を作ろうか悩んでいました。しかし、1人が1度手を動かしてみると、友達同士で見合いながら、自分の家、顔、ロボットなどを何度も作りかえながら並べることを楽しんでいました。紙コップ、洗濯バサミ、色紙を用いてお花をつくる子供が多く見られました。しかし、どのお花も色の組み合わせ方や形に個性が見られ、おもしろかったです。色紙を並べていた子供は、色紙を並べ、どう繋げていくかを悩んでいたが、けんけんぱを作り大きな円になるまでつなげていました」(学生B)。

④ 14時30分～15時15分 5年生対象「あんなところがこんなところに見えてきた」⁹

「プレゼンと材料を準備してワークショップに臨みました。プレゼンは教科書だけでなく、ジンベイザメなどの自分が作った作品の例を入れたことで、子供には場所を他の場所やものに見立てて作り変える活動であるということを理解していたように思います。ただ、もともと1時間で行う単位ではなく、時間が必要であることに加えて、担任の先生が教室以外も使っていていいと言ってしまい活動の範囲が広がったことで時間が全体的に足りず、子供が思うままにやりきれなかったり鑑賞の時間が取れなかったりしてしまいました。ここは、時間をあまり考えていなかったり、もっと材料のセロハンを減らしたりして対応できたかもしれないと反省しました。

子供の活動を見ると、階段の壁の長さや斜めを生かしてまず川を作って、その上に太陽を作った子供のグループや、机がつながっているところが空港の滑走路に見えたことから空港を作ったグループ、消毒器をくじらに、トイレの白いドアがうつる鏡をサメの口の中(歯)に見立てて作った子供がいました。私の発想にはなかったものばかりで子供の発想力と表現力に感心しました。これらの活動の様子から、子供たちは空間を生かして他の空間に作り変えることができていたと思います。本当に日本と変わらないなと思いました。日本の同学年の子供と同じように活動したり反応したりしていることができることは造形遊びのすごいところだなと思いました。

最後に、すでに頭が柔らかくすごい発想力を持つ

子供たちに、もっと考え方を広げることができるように、同じところでもいろいろな見え方がするというのを伝えるために、作っている最中にいろいろな見え方を揺さぶるような言葉掛けをするといいいのかなと思いました」(学生C)。

⑤ 15時15分～16時 6年生対象「自然を感じるすてきな場所で」¹⁰

「本ワークショップでは、6年生相手に正しい英語を使おうと一生懸命話していたため、活動内容が伝わっているか不安でした。しかし、例を示すと活動内容を理解できた子供が増えました。そのため、活動の例を示すことである程度の活動内容を教師だけではなく子供も理解することができていると思いました。また、紐をねじり、教科書には載っていない自分なりの表現で風を美しく見せるものをつくっている子供もあり、多様な表現を見ることができました。最後のワークショップであり親御さんも迎えに来ているため、限られた時間の中で、試して作り直すことまでできず、鑑賞の時間も十分にとることができませんでした。しかし、スペインは風が強く、子供たちが本気で楽しそうに風を感じる様子が見られたので、本当によかったと思いました」(学生B)。

(3) 2023年3月15日(訪問5日目)の実践

① 9時～9時45分 5歳児クラスB対象「しんぶんしとなかよし」¹¹

「子供たちが新聞紙を取りやすいようにバラバラにしていくつかの場所に設置したが最初から新聞紙がバラバラであったため、子供たちは新聞紙を破くことに興味を持ってしまい、それを破くこと以外の活動に行くのに時間がかかってしまった。新聞紙をバラバラにせずに、自分が必要な分だけ自分で取ることによって材料を大切に使い、破く以外の活動にもつながる。場の設定の重要性をこのワークショップで感じた。しかし、時間が経つと一人の子供が髪に新聞紙をリボンのようにつけてそれを周りが真似をするように手や足、首などにつけて身につけることを楽しむ姿を見ることができた。さらに、机の下を秘密基地のようにしていた女の子の姿を見て他の子供たちがそれをどんどん進化させていく姿も見られ、中にいる子供はとても楽しそうであった。

反省としては、最初の新聞紙の設置の仕方と片付けに思った以上に時間がかかるということである。しかし、片付けの際も新聞紙をかき集めるのを楽し

む姿が見られ、片付けまでが活動であると感じたワークショップであった」(学生 D)。

② 11 時～ 11 時 45 分 2 年 A クラス対象「しんぶんしとなかよし」¹²

「5 歳児クラスの反省を活かして、新聞紙はバラバラにせずにいくつかの場所にまとめて設置し、新聞紙でどんなことができるか例を示す際にも身につけることを示した。5 歳児クラスとは対照的でこのクラスは最初は静かに新聞紙を巻いたり、破いたりしていたのが印象的であった。しかし、次第に靴のように足に巻いたり、紙吹雪のように細かくしたり、折り紙のように使っている子供も見られた。子供たちなりに新聞紙に触れて楽しむ姿を見ることができた」(学生 D)。

③ 11 時 45 分～ 12 時 15 分 2 年生 B クラス対象「しんぶんしとなかよし」¹³

「2 年生なので英語が完全に伝わったかは定かではないが、体のパーツを示したり、実際に例を見せたりしたこと何をするのかが伝わったと感じた。2 年 A クラスの活動始めが静かだったため B クラスも静かに始まるかと思ったが、想像以上に破ることを楽しむことから始めたので、クラスの雰囲気や導入の仕方によって子供たちの学習の様子は異なると改めて感じた。初めから新聞紙をびりびりに破ることを楽しみ出したこと、また担当の先生も一緒に破って紙吹雪のようにしてまき散らしていたために子供たちがヒートアップしたが、その中でも黙々と新聞紙を巻いて野球のバットを作ったり、折りたたんで帽子を作ったりしている子供の様子も見られた。そのような子供たちの写真を撮ることが評価や記録そのものとなり、また造形遊びで重視される過程を大切にすることにつながるものが体感できた」(学生 E)。

④ 14 時 30 分～ 15 時 15 分 3 年生クラス対象「ぬのをつないで」¹⁴

「『ぬのをつないで』の題材で 1 番難しかったことは、材料である布の準備である。教科書では大きな正方形の布や、正方形で四隅に穴が開いている布を使用していた。学校によってそのような布の用意があるとは限らないことや、不織布の布を用意するには費用が他の造形遊びの題材と比べてかかることなどが課題としてあげられる。今回のワークショップでも、布を 180 枚用意していたがワークショップの中盤あたりから布が足りなくなってしまった。布を

長くつなげようとしていたグループが数グループに分かれると、布の使用量がさらに多くなってしまった。布が足りなくなると子供たちが本当にやりたかった活動ができなくなってしまうので十分な布の用意が必要だと感じた。

場所の設定があいまいだったため、ここからここまでだよというのをしっかりと指示しておく必要があった。しかし、外のここで布を繋げたいという子供たちの思いが出てきたことが嬉しく感じた」(学生 F)。

⑤ 15 時 15 分～ 16 時 4 年生クラス対象「まどをのぞいて」¹⁵

「『窓の外に見える形を生かして景色を作り変える』という活動内容が伝わっている子供と伝わっていない子供がいた。伝わっている子供は校庭にあるゴールに合わせてサメの顔を作ったり、木に合わせて巻きついている蛇を表現したりしていた。活動内容が伝わっていたことに感動し嬉しく感じると同時に、分かっている子供に活動内容をみんなにスペイン語で説明してもらるようにした方が良かったと感じた」(学生 E)。

Ⅲ マドリッド自治大学における研修

1 2023 年 3 月 17 日 (木) (訪問 6 日目) 授業参加
(1) 10 時～ 11 時 30 分 (小学校教員養成課程対象)

講義

① 概要

最初の授業は、本来、ロメロ教授たちの授業のコマに、建築の先生を招いて、学生が先生になったときに総合的な学習の指導もできるように配慮してもらったものである。スペイン語の講義の内容はなかなか理解できなかったが、日本の折り紙を使った建築の基本的な概念の説明や、安藤忠雄や磯崎新、子供の施設の建築の専門家である千田満の紹介もあり、我々の参加を意識した内容だった。特に興味深かったのがシステム・ルポ¹⁶という団体が開発したウレタンのパズルを組み合わせて簡単な建築の仕組みを理解させようとする内容だった。ここに日本の伝統的な在来工法の木組みが使われているという紹介もあった。授業後にいろいろ内容についてお聞きすると、私たち日本人が参加するということで、日本の建築家について触れたのではなく、たまたまそのような流れであったということであった。

②学生の感想

「建築の授業では、折り紙は折り方で面積が変わる面白さや、累乗に増えていく面白さについて知ることが出来ました。同じグループの学生たちは初めは怖そうだなと思っていたのですが、本当に優しく、授業のほとんどを、英語で解説してくれました。そのため、全く関わりのない建築関係の授業も楽しく受けることができました。

その後、システマ・ルポを使って釘を使わずに支える建築術を体験しました。ブロックでマドリードの、代表的建築物を再現することで建築技術の素晴らしさを体感しました」(学生B)。

「内容は建築学的内容で、理解することは難しかったが折り紙や日本の有名な建築家の名前を出して日本を意識してくださったのだと思った。実際に折り紙を折ったりブロックを組み立てたりする活動の際には、同じグループになった学生に教えてもらいながら授業を受けた。同じグループになった学生は積極的に話しかけてくれ、マドリードで気に入った場所はどこか、富山はどんなところか、日本のアニメについてなどたくさん話をする事ができた。日本のアニメはやはり有名なようで、『進撃の巨人』と『NARUTO』の話で盛り上がった。また、学生の何人かには日本語が書かれている服を着ている人もいて日本でいうなんて書いてあるかはわからないがかっこいいかわいいという理由で英語やフランス語などが書かれている服を着ている感じなのだった」(学生D)。

(2) 15時～17時 (小学校及び幼稚園教員養成課程対象) 講義

①概要

ソフィア氏が我々と同様に日本の図画工作科教科書を元に「あんなところがこんなところに見えてきた」¹⁷を実施された。引率学生たちは、学生グループに参加しながら、タブレット端末で過程を記録していった。

視覚的なプレゼンテーションは一切なかったが、学生たちは内容をよく掴んだようで、導入が終了すると、あっという間に教室内外に広がって、活動を始めた。最後に筆者が造形遊びの意義を紹介して修了した。

②学生の感想

「ソフィアさんの『ZAS Labo (Zoukei-Asobi in Spain)』のワークショップに参加した。活動場所も、

材料も自由度が高く、ルールにしばられない感じが印象的だった。自分が参加していたグループでは、最初は階段の手すりが蛇みたいだとなったが、単純すぎるから違うのにしようとの場所を探すことにした。次に見つけたのは、教室に入る扉の丸い窓が潜水艦みたいだという話になり、潜水艦をつくることにした。潜水艦の『submarine』の単語が恥ずかしながら分からずにいたら『like an airplane in the sea』と分かりやすく言い換えてくれて理解することができた。同じグループの人に話を聞くと、ソフィアさんの授業を受けるのは初めてだと言っていたので初めて造形遊びをするのにパワーポイントなしで活動を理解し、子供と同じように場所を変えていくことができるのはソフィアさんの説明や例の提示方法が分かりやすかったことや、UAMの学生の発想力も豊かであるためだと感じた。

いつもの場所をつくりかえるというのが本題材のポイントであるためつくる前と後の変化が分かる写真を用いることが重要だと考えた」(学生F)。

2 2023年3月17日(金)(訪問7日目) 授業参加(1) 概要

筆者が造形遊びの簡単な講義をした後に、学生たち全員がTTで現地の学生たちに造形遊びの模擬授業を行った。内容はアルデバラン学校で行ったものを学生用に若干手直したものである。教師役の学生が英語でプレゼンを見せた後に3つの造形遊びを順番に行った。前日のソフィア氏の授業に参加した際に仲良くなったクラスもあったので、よい雰囲気の流れでいった。とにかく現地の学生たちは実に楽しそうに造形遊びに取り組んでくれた。

(2) 10時～13時30分 幼稚園教員養成課程対象クラス「あんなところがこんなところに見えてきた」¹⁸ 講義内ワークショップ(学生F・学生C担当)

「幼稚園の先生を目指すスペインの学生たちに説明して活動を始めると、いろいろな場所を使って空間を変えている様子が見られました。全く同じタンクのようなものでも、ある学生のグループは蝶蝶に見立てており、他の学生のグループはロケットに見立てており、両者も筒型の形を生かして作っていたが思いつくものが異なり面白いと思いました。このことを鑑賞の時間で伝えることで、たくさんの拍手をもらい嬉しかったです。

また、活動中はすべてのグループを記録しながら回りました。蝶々とロケットの他に、猿とベッドや、ターザンロープ、顔などいろいろなものに見立てており、考えながら付け足している様子が見られたので、日本の造形遊びのよさや楽しさが伝わっているといいなと思いました。記録することでそれらの過程も写っていると思うので見るのが楽しみです」(学生 C)。

「前回のソフィアさんの授業を見て大学生たちも活動を理解しているように見えたので説明は重要な部分だけ最低限行い、活動の時間を長くとうろと考えていた。説明するときに、例を減らしてしまったために、活動が分かりにくくなってしまった。あとからソフィアさんにも言われたが、子供たちの脳は柔軟でなんでも想像力で思いつくことができるが、大学生の脳はカチカチに固まっていて子供たちのように想像するのは難しいので、大学生だからこそ例をたくさん提示して考えやすいようにしたらよかったと感じた」(学生 F)。

(3) 15 時～17 時 (小学校及び幼稚園教員養成課程対象)「あんなところがこんなところに見えてきた」¹⁹ (学生 D・学生 A 担当)

「2 回目は私が授業者であったが、ソフィアさんとの連携がうまくいかず時間配分が想定していたものとは異なったが、スピーカーをモンスターズインクのマイクや金魚に見立てているのが印象的であった。特に金魚を作っていた学生は、材料が足りなかったようだったが、工夫して金魚を作っていた」(学生 D)。

「スピーカーを金魚とマイクワズースキーにしているグループがあった。一つのグループが1つの場所から違う作品を二つ作っていて造形遊びの楽しさを感じてくれているようでした」(学生 A)。

(4) 17 時～19 時 (小学校及び幼稚園教員養成課程対象)「自然を感じるすてきな場所で」²⁰ (学生 B・学生 E 担当)

「前日のソフィア先生の授業で仲良くなった学生のグループが盛り上げてくれました。グループで活動したことでよりは大きく迫力のある作品ができていました。ただ、作った後の指示を出していなかったので、つくり終えたと分解してしまったグループがあったので残念でした。また、グループでの活動であったので、つくっている途中で試すという行為を促すことが難しかったです。二時間あれば、実際

に風に当ててからつくり直すことが可能であったかなと思いました。しかし、どのグループも個性あふれる素敵な作品でした」(学生 B)。

「風を美しく見せるものを、作りながら試せるように扇風機を設置したが、作っている途中に試している様子はあまり見られなかった。『Did you try it?』と声をかけてみたが、『Later.』等作品をある程度の形にしてから試したいと言う気持ちが伝わってきた。一方で、導入時に過程が大事なので過程を記録してと伝えたからか活動中にも写真や動画を撮っている様子が見られた」(学生 E)。

Ⅳ マドリッド日本人学校訪問 3 月 14 日 (火) (訪問 4 日目)

1 概要

海外日本人学校の状況を把握するために、第 3 回目訪問(2012 年度)から、マドリッド日本人学校²¹の訪問をプログラムに組んで実施してきた。スペインの現地校とは異なり、日本と同じ年度進行で年間の予定が進行しているので、3 月の訪問時には、授業の内容はほとんど修了し、卒業式や終業式の直前の訪問となるが、毎回快く引き受けてくださっている。

今回の訪問では、1、2 年生の生活科を担当されている教頭先生のお計らいで、「マド日をしようかいしょう」という授業を特別に実施していただいた。子供たちが、学生とパートナーを組んで学校内を案内する授業をしてくださった。学生も自己紹介をした後、子供について校舎内を歩いて行った。子供たちはみんな言葉遣いが丁寧で、学生といろいろな話しをしながら、改築中の校内を紹介してくれた。

2 学生の感想

「学校に入るとまず『おはようございます』と日本語で迎えてくださり聞きなれた言葉がスペインでも聞こえたことが嬉しく感じた。図書室で待機している間に本棚を見ているとまだ工事中ということで本の数は少なかったが、日本の学校の図書館とほとんど同じラインナップだった。

次に案内されたのは、小学校 1、2 年生の教室だった。教室には 5 名の子供がいて、授業を受けていた。授業を見させてもらえるのだと思っていたら大学生 VS 子供たちのためのこニョッキバトルが始まり、ペア分けをしてそれぞれ学校を案内してもらえることになった。初めて会った私たちに丁寧に音楽室や体育館、運動場などを紹介してくれた。校庭の

ところに桜の花が咲いていると思ったらアルモンド（アーモンド）の花だった。とても良く似ていて見分けがつかなかった。ペアの子と話していると、スペインでうまれてスペインで育ったと言っていた。祖父母の家に行くために日本に何回か行ったことがあると話してくれた。スペイン語、日本語はもちろん、英語、フランス語も話せると言っていた。日本人学校は、教師は文科省からの派遣で働いている。英語力等はあまり関係なく、国を選ぶことはできない仕組みだということが分かった。教科書も、子供の国籍が日本であれば文科省から受け取りができるという。日本人学校は、日本の学習指導要領に準拠し授業が行われており、教科書も日本のものを使い、行事も日本とほとんど同じだという。

しかし、登下校がスクールバスで行われているためその時間に授業の時間も合わせているのでどの学年でも関係なく毎日6時間目までである。そのため、校長先生も授業を行う、英語だけではなくスペイン語の授業もあるという日本との違いがあった。また、金曜日だけ自分たちの教室を掃除する時間がある。それは、教室をきれいにするというよりは、文化として取り入れているという。たしかに、アルデバラン小学校に行ったときは掃除の時間はなかった。給食も日本のように毎日あるのではなく、毎週水曜日、月に4回日本食、スペイン料理、中華料理など色々なメニューのものが出る。『いただきます』『ごちそうさまでした』も日本の文化として必ず行っていると話されていた。各教室には電子レンジが置かれていた。学校を紹介してくれたペアの子に聞いてみると、弁当を温めるのに使っていると言っていた。日本に住み、生活していると温かい給食が出てくるのはどうしても当たり前のように感じてしまっていたので今まで生活してきた環境がとてもありがたかったのだと実感した。

日本人学校では、そこで働く先生方の話を聞かせてもらうだけではなく、実際に通っている子供たちとも交流ができとても貴重な時間を過ごすことができた。いつも大学の授業で、小学校で行う授業では子供たちに授業の内容を行う必要感を感じさせるのが大事だと学んできた。子供たちにとっても今回の機会は学校を紹介する必要感のある授業設定だったと感じた」（学生F）。

V 美術館・世界遺産見学

1 美術館見学

（1）2023年3月11日（土）（訪問2日目）ソフィア王妃芸術センター見学

①概要

本美術館は、18世紀に病院として建築された建物を2005年フランスの建築家であるジャン・ヌーヴェルによって改装された20世紀の近現代美術の美術館である。スペインを代表するパブロ・ピカソやダリ、ジョアン・ミロなどの作品を多く所蔵することで世界的に有名である。

昼過ぎにマドリッドに到着して、夕方にソフィア王妃芸術センターを訪問した。スペインをはじめ、欧米の美術館に平日に訪問すると、必ずと言ってよいほど学校、学級単位での約20人ぐらいの子供生徒と引率の教師らしい人が2、3人付いたグループに遭遇するので、滞在計画の中でできるだけ位置づけてきた。しかし、今回は土曜日の夕方ということで、学校単位の見学グループは見受けられなかった²²が、多くの観光客らしい見学者がスペインの内外から訪れている様子は確認できた。学校、学級単位で美術館や博物館を訪問して学習する文化は、日本と比べものにならないくらい充実しており、展示作品の前で車座になってクイズ形式で教師またはボランティアスタッフとやり取りする姿もよく目していた。

学生たちには、最初にパブロ・ピカソ作の「ゲルニカ」を見るように指示して、後は、自由にミロやダリ等の作品も含む作品を自由に見学することができた。今回の訪問でもこの絵画については、小学校の図画工作科や中学校の美術科の教科書でも取り上げられており、実物を前にしてその絵の大きさに圧倒されつつも、戦争の悲惨さについても感じ入ることができたと思われる。

②学生の感想

「特に印象的だったのはピカソの『ゲルニカ』である。日本の教科書に載っており、またテレビでも見たことがある有名な作品であることに加え、戦争がテーマであるため見てみたいと思っていた。実際に見るとばらばらになった四肢や、悲しそうな顔から戦争の悲痛さが伝わってきた。一方ですぐ隣の部屋に『花瓶を持った女』という彫刻が飾ってあった。とても表情がひょうきんで、ゲルニカとは対照的な作品に思えたが、構図がゲルニカの右上に描かれて

いる明かりを持った女と似ていると感じた。『ゲルニカ』と『花瓶を持った女』が同時に見られるような展示になっていたことから作品の展示の仕方には意図があると思った」(学生 E)。

(2) 2023 年 3 月 14 日 (火) (訪問 4 日目) プラド美術館見学

①概要

本美術館は、スペイン・ハプスブルク家の膨大なコレクションを元に 19 世紀になって一般公開されたことをきっかけにさらにコレクションが寄付等で集まるようになり、世界有数の美術館とされている。

マドリッド日本人学校訪問後、プラド美術館で作品鑑賞をした。膨大な数の作品が展示してあり、今回の訪問では、半日の予定しか確保できないので、全てを見るのには時間が足りないのに、引率学生には、今回の訪問ではガイドブックに掲載されている作品を中心に鑑賞をするように指示を出しておいた。

平日なので、先生に引率された子供たちに出会ったが、今回は昼からということで、中高生らしき団体に何度も遭遇した。やはり、20 名程度の人数で歩いていた。鑑賞後は、ミュージアムショップで合流し、美術作品に関係する書籍や多彩な用品を目の当たりにすることで、スペインにおける美術文化の広がりを感じることができた。

②学生の感想

「とても広く、作品の数も多かったので、最初にガイドブックに乗っている有名な作品と見たい作品を厳選して回りました。ゴヤの着衣のマハと裸のマハを比べて鑑賞しました。全く同じだけど服を脱がせただけかと思いきや、よく見ると、裸のほうはすっぴんだったり、絵の大きさも異なったり、違いがあることに気付いた。大学の講義で詳しく話を聞くのが楽しみになりました。『ラス・メニーナス』も印象に残りました。全部で 11 人いる中で、どれがどれかを考えながら、どのような構図が見ることが面白かったです。王女が一番目立つようになっており、その周りに働く人や遊び相手がいて、鏡の中に王妃と王がいることが自分も王妃と王のそばから見ているというような感じになるので、遠近感もあり、作品の中に入り込むことができるような作品でした。その他にも、『快樂の園』や『受胎告知』、『三美神』、『アダムとエヴァ』など多くの有名な作品を生で見ることができてとてもいい経験になりました。

また、美術館の中のカフェでチーズケーキとイチ

ゴオレンジジュースを飲み、とってもおいしかったです。いい思い出になりました」(学生 C)。

(3) 2023 年 3 月 19 日 (日) (訪問 7 日目) エル・グレコ美術館見学

①概要

本美術館は、ギリシャからトレドに移り住んだ画家エル・グレコ (1541 年～1614 年) が住んでいたと言われる邸宅周辺を改装した 16 世紀のルネサンス様式を再現した美術館である。

筆者が最初に国際教員証を見せて引率の学生を連れてきていることを告げると入場券を渡してくれてワングループの勉強する団体扱いだった。後は学生の証明書を確認するだけだった。日本から来たと学生が告げると実に愛想よく接してくれたことが印象的であった。スペインに来てから美術館等は、教員も学生も全部無料で入館できた。因みに証明書はスマートフォンにダウンロードしてそのページを見せるタイプにかわっていた。美術鑑賞を積極的にさせるお国柄というか、日本でも学生が気楽に美術館や博物館を訪れることができれば、未来につながって行くのにと考えさせられた。

②学生の感想

「なんといっても、かわいらしいおうちの中にある美術館だと思いました。スペインの中庭のパティオがあり、とても素敵な空間であるなと思いました。また、階段の側面などいたるところにかわいい模様でタイルが敷き詰めてあり、伝統的な家なのだなと思いました」(学生 B)

「エル・グレコが描いたキリストと 12 人の弟子の絵でどれがユダかを予想した。『最後の晩餐』の順序どおりなのか、顔色の悪い人なのか想像しながら鑑賞することができた。また、パテオ (中庭) があり日差しが暖かいので、とても和やかな雰囲気だった。庭に生えている木に紫色の毛糸が巻き付けてあり、日本の小学校の図画工作科の造形遊び『ひもひもワールド』のようになっていた」(学生 E)。

(4) 2023 年 3 月 19 日 (日) (訪問 7 日目) アルカサル (軍事博物館) 見学

①概要

本博物館は、トレドにある元は 3 世紀にローマ帝国の宮殿があった場所に、11 世紀にイスラムの支配からアルフォンソ 6 世が奪還した際に要塞に改築した建物を利用している。入館してすぐに、ローマ時代の遺跡をそのまま見せているスペースもあり、

州スペインの軍事の歴史を詳しく展示している。

当日は、教員証や学生証がなくても入館者全員が全くの無料で入れたのだが、展示室の改装中なのか、エントランスにはいくつかの展示物が出してあったのみで、中世の甲冑や武器や軍服の展示品を見る事ができなかった。

②学生の感想

「入口から圧巻でした。城の城壁を砕いたような空間にエスカレーターが配置されていました。また、子どもに向けた歴史のワークショップが行われており、そのために来館者は静かにするよう注意されました。スペインでは子どもに対する美術教育がしっかりされていることがわかりました。また、無料開放日で中を見ることができず、パンフレットだけしか手に入らなかったのが残念でした」(学生 B)。

「建物の中に遺跡がありとても不思議な感じがした。この日は無料開放日だったようで、中を見ることができずとても残念であったが所々にあった少しの展示物を見ることができてよかった。ある展示室に行くと子供たちを対象に歴史の授業をしており、何を言っているかはわからなかったが日本でも博物館で歴史の授業をやったら楽しいだろうと思った。スペインの人たちにとっては博物館や美術館が日本より身近なものだと感じた」(学生 D)。

2 世界遺産見学

(1) 2023年3月18日(土)(訪問7日目) エル・エスコリアル修道院見学

①概要

この修道院は、マドリッドから近郊線(レンフェ)に乗って約1時間の距離にある。正式名称を「王立サン・ロレンソ・デ・エル・エスコリアル修道院」と呼び、フェリペ2世の命で、1557年に建設された。王立の複合施設であり、博物館、画家エル・グレコなどの作品が保管されている美術館、世界的に貴重な古文書が多数保管されている図書館、約100体の王家の遺体が大理石の棺桶に安置された霊廟、ステンドグラスが美しい大聖堂など多様な施設が併設されている。1984年に世界遺産に登録されている。

パブロ・ロメロ・ゴンザレス教授が、我々を出迎えて案内を担当してくださり、修道院内の施設の説明を学生たちに丁寧にしてくださった。

②学生の感想

「スペインの建築技術の素晴らしさを感じました。

ステンドグラスや美しい彫刻がたくさん飾っており、芸術性の高さだけでもキリスト教徒に改修したくなるほどでした。上から見た景色はとても綺麗で天気が良かったのもあり、遠くまで見晴らしが良かったです。雪があまりなく日本から見える山とはまた違った山の美しさがありました」(学生 A)。

「修道院自体が初めてであったのですが、すごく美しく、感動しました。様々な文化が混じりあったアンティークな家具や建物の造りが面白かったです。霊地が地下にあり、世界史で学習した人達が本当に埋まっているところが驚きました。ロメロ先生は死人の匂いがダメだと言っていたのですが、私にはその匂いが分かりませんでした。お墓には小さな子供から大人までが細部まで丁寧に装飾された棺に入られていました。霊園となっている地下と、修道院やかつて皇居として使われていた地上とでは雰囲気が大きく異なっており、同じ建物であることが信じられなくなりました」(学生 B)。

(2) 2023年3月18日(土)(訪問7日目)トレド

①概要

トレドは、先史時代から人が住んできた歴史があり、6世紀に西ゴート王国の首都となり、8世紀から11世紀にはイスラム勢力のウマイヤ朝の支配下に置かれた。レコンキスタ(再征服運動)でキリスト教のカスティーリャ王国の首都となり、その後、アラゴン王国と統一されてスペイン王国の一時的な首都の役目をはたしていたが、フィリッペ2世がマドリッドに首都を移してから衰退していった古都である。歴史と共に様々な勢力に支配されてきたことからキリスト教とイスラム教、ユダヤ教の文化が共存する独自の文化がある。1986年に世界遺産に登録された。

1週間前にチケットを確保できた新幹線に乗って、マドリッドから約30分のトレドに行った。駅に着いた途端にトレド駅のイスラムの様式を取り入れた美しい景観に驚かされた学生たちは、いきなり撮影を始めてなかなか外に出なかった。

②学生の感想

「トレドに着いて駅の造りに驚いた。大きな時計があり、トイレの外観でさえも世界遺産なのではないかと思うほど美しかった。石畳の急な坂をしばらく歩くとかわいい雑貨屋さんやお菓子屋さんなどお土産店がたくさん見えてきた。タイルなども日本では見ないようなデザインだった。スペインの名物の

マサパンのお店もあり、インターネットや本で調べていたものを実際にも見る事ができた。カテドラルは、どの方向を向いても綺麗なステンドグラスが貼られていた。大昔にこの巨大な聖堂が建てられたと聞きどうやって大理石を大量に使って高い天井にステンドグラスをちりばめたのか当時の技術の高さに驚いた」(学生 F)。

「トレドに着くまでの新幹線から、なだらかな丘が連続して地面が波打つような形をしている中に台地のような形の地形(ケスタ、メサ、ビュート)が見られた。トレドは古代都市で、駅に着いた途端に石を積んだ壁が見えたり、ステンドグラスがはめ込んである駅だったりして風情があった。壁に隙間があるのでハト等の鳥が巣を作ったり休んだりしていた。アトーチャ駅の近くの郵便ポストは落書きで汚れていたが、トレドの郵便ポストは落書きがない代わりにハトの糞で汚れていた。ポストの汚れ方の違いでどのような街かわかる感じがしたので興味深い」(学生 E)。

Ⅵ おわりに

今回の訪問の計画段階で特に入念な準備をしたことは、単なる物見遊山に終わることのないように、海外教育実習としてのプログラムを充実させることであった。したがって、公立学校での授業体験をワークショップとしてできるだけ数多く実施することや、大学における学生相手の模擬授業を可能な限り、経験させることを受け入れ先において実現させることができた。

特に CLIL (内容言語統合型学習)²³として捉えて実施したが、日本の図画工作科教科書を翻訳してプレゼンテーションをつくり、日本とほぼ同じ内容で子供たちに指導できた経験は、学生たちが教育現場に出た際に大きな自信につながることもなると考えられる。したがって、CLIL として本研修におけるワークショップ等に検討を加えてより充実した内容になるようにしたい。

実は、この訪問の初期の頃に比べて、マドリッド自治大学の学生の英語力がとても向上しており、意思疎通ができない学生がほとんどいなくなっていたのには驚かされた。パブロ・ロメロ・ゴンザレス教授にも確認したが、やはりこの 10 数年間で小学校からの英語教育を充実させたおかげだと言っておられた。

この事実は、我が国の教育にも参考になることである。特に図画工作科における「造形遊びをする活動」は、簡単なやり取りでも理解できれば、材料と場所と整えるだけで同じ内容の授業ができて、子供が日本と同じ活動ができる点で、CLIL の実践として活用していくことの可能性を大いに感じた。

また、海外に渡航して初めて日本の教育を見つめ直すきっかけとしてマドリッド日本人学校の訪問は意義があると思われる。日本から遠く離れたヨーロッパの地で、日本の学習指導要領に基づいて作られた年間指導計画で授業や行事等が進行していく様子を確認することで、学生たちが自分たちの受けてきた教育の意味を問い直すきっかけになると思われる。

さらに、スペインの美術館や博物館、世界遺産の見学は、観光目的というよりも異文化理解としての経験として捉え直せば、就職してからはなかなか行くことのできない異国の情緒は子供たちに体験談として聞かせることができる。また、自身が日本から離れて海外に行くことで、マジョリティからマイノリティとなり、言語や慣習が異なることで、生じる困り感を実感することも可能である。

以上のように、本訪問研修を海外教育実習として捉え直すことが十分可能であり、今後の実施に向けてさらに内容を検討していくことにする。

なお、今回の訪問も含むこれまでの 10 回分の訪問研修について CLIL 教員養成の立場から分析した学術論文は別紙において発表する予定である。

【謝辞】

本報告では第 10 回マドリッド自治大学等訪問研修に参加した学生および元学生にレポートの掲載を許可していただいた。誌上にて感謝の意を表します。

また、本訪問団を快く受け入れて下さったマドリッド自治大学教育学部のパブロ・ロメロ・ゴンザレス教授、ソフィア・パステル・マタモロス講師をはじめ先生方、および学生の皆さん、アルデバラン学校およびマドリッド日本人学校の先生方、子供たちにも感謝の意を表します。

受付年月日 (2023/5/22)

受理年月日 (2023/7/20)

【注】

¹ 隅敦「スペインマドリッド自治大学との交流を通して：国際交流の始まりと継続にあたって」富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 7 巻, pp. 121-134, 2013

² 「Colegio Público Aldebarán」<http://novedades-aldebaran.blogspot.jp> (2023年4月19日確認)

³ 第9回訪問研修(2018年度) 第8回訪問研修(2017年度) 第7回訪問研修(2016年度) 第6回訪問研修(2015年度)

⁴ 第9回訪問研修(2018年度) 第8回訪問研修(2017年度) 第7回訪問研修(2016年度)

⁵ 「造形遊びをする活動とは、材料や場所、空間などの特徴から造形的な活動を思い付いて活動するものであり、絵や立体、工作に表す活動は、表したいことを見付けて、それに必要な材料を選んで表すものである」『小学校学習指導要領解説(平成29年告示)解説 図画工作編』文部科学省, 2017年, p.28

⁶ 「いっぱい つかって なに しょう」『ずがこうさく たのしいな おもしろいな 1・2 上』日本文教出版, 2021年, p.38-39

⁷ 同上

⁸ 前掲 6

⁹ 「あんなところがこんなところに見えてきた」『図画工作 見つめて 広げて 5・6 上』日本文教出版, 2021年, pp.10-11

¹⁰ 「自然を感じるすてきな場所で」『図画工作 見つめて 広げて 5・6 下』日本文教出版 2021年, pp.22-23

¹¹ 「しんぶんしとなかよし」『ずがこうさく たのしいな おもしろいな 1・2 下』日本文教出版, 2021年, pp.18-19

¹² 同上

¹³ 前掲 11

¹⁴ 「ぬのををつないで」『図画工作 ためしたよ 見つけたよ 3・4 上』日本文教出版, 2021年, pp.12-13

¹⁵ 「まどをのどいて」『図画工作 ためしたよ 見つけたよ 3・4 下』日本文教出版, pp.46-47

¹⁶ <https://sistemalupo.com/#inicio> (2023年4月30日確認)

¹⁷ 前掲 9

¹⁸ 同上

¹⁹ 同上

²⁰ 前掲 10

²¹ 「マドリッド日本人学校」<https://sites.google.com/view/cjmspain/> (2023年4月30日確認)

²² 前掲 1, p.128

²³ Content and Language Integrated Learning (内容言語統合型学習) の略。<https://www.j-clil.com/clil> 2023年4月30日確認